

第8話 小満芒種篇 未来の空へ

1

お元気ですか。5月に入ってから、風の島では雨の日が続いています。毎日ジメジメしていると、何だか暗い気持ちになりますが、花たちはぴちゃぴちゃと喜んでいるように見えます。私は梅雨の間にクバのカゴ編みを完成させる予定です。

雨が続くこの季節、島のみんなは山猫のウェザーおじさんのもとへ通います。ウェザーおじさんの特技は、ヒゲをきゅっきゅっきゅっと3回しごいて、明日の天気を占うことです。ヒゲがまっすぐになったら晴れ、クルンと丸まったら曇り、チュルチュルになったら雨です。この占いを参考にして、島のみんなは洗濯物を干すかどうか決めるんです。

島のみんなが天気を知りたいのには、もう一つ理由があります。それは、梅雨の晴れ間に合わせてのど自慢大会が開かれるからです。先週開かれたのど自慢大会では、アマガエルのキロロが一番輝いていました……。

2



今年の正月、キロロは一大決心をしました。臆病で恥ずかしがり屋、それに、とびきりの音痴。そんな自分を変えようと、のど自慢大会への出場を決めたのです。

目標は、風の島の歌姫であるイソヒヨドリのアヤカさん。私もあんなふうに、大声で伸び伸びと歌ってみたい！ そう考えたキロロは「未来の空へ」という歌の歌詞を自分で書いて、カエル仲間で音楽家のP太郎に曲を作ってもらいました。

「み～らい～のそ～らへ～……グゲ～！」

しかし、どんなに練習しても、なかなか歌は上達しません。声はふるえてしまうし、サビのところでは声が裏返ってしまいます。そこで、キロロは鳩のキュービー先生が開いている歌声教室へ通うことにしました。

3



「キロロさん～♪ もっとおなかから声を出して～♪」

歌声教室に通って4か月がたっても、キロロの歌はうまくなりません。それに、他の生徒の前で歌うと、恥ずかしさで体が真っ赤になってしまいます。緊張してしまうので、右手には黄色いハンカチを握りしめていなければなりません。

「み～らい～のそ～らへ～……グゲ～！」

ある日のこと、教室の外から「キャツキャツキャ！」と笑い声が聞こえてきました。「おい、今の聞いたかよ！ グゲ～だってさ!!」。笑っているのは、ヤモリのワールーとその仲間たちです。私……もう歌えない。深く傷ついたキロロは、逃げるように家に帰りました。そして、それから歌声教室へは通わなくなりました。



4

ある午後、キロロの家にキツネのコンコばあさんが訪ねて来ました。コンコばあさんは、歌声教室の裏にある家で、病気のムナガーじいさんと一緒に暮らしています。

「あなた、体調でも悪いの？ ここのところ歌が聞こえてこないから、心配になって来てみたのよ」

コンコばあさんの優しい雰囲気包まれて、キロロは胸の内を明かしました。どんなに頑張っても、歌がうまくならないこと。ワールーたちに笑われて傷ついたこと。もう歌わないでおこうと思っていること……。すると、コンコばあさんはほほ笑みながら言いました。「確かに、あなたの歌はうまくないかもしれない。

5

のど自慢大会の日、キロロは会場に向かいました。家を出る直前まで参加を迷っていましたが、コンコばあさんとムナガーじいさんの顔が浮かんで、出場することにしたのです。でも、いざ会場に着いてみると、不安と緊張で足がガクガク震え出しました。

生演奏をお願いしたP太郎と上の空で話をしているうちに、早くもキロロの出番が回ってきました。

「続きましては、エントリーナンバー7番、キロロさん！ 歌は『未来の空へ』です。どうぞ!!」

ステージに立ったキロロは、頭が真っ白、体が真っ赤になりました。それに加えて、大事なハンカチを忘れてしまったことに気づきました。ああ……やっぱりダメだわ。逃げ出したい……。

風の言葉

どんなに下手でも、
情熱はしっかりと伝わる

でもね、とても心がこもっているわ。不思議と胸が温かくなるの。……それでね、願いがあるの。今度ののど自慢大会に出てほしいの。いつも家にこもりっぱなしのムナガーじいさんが、あなたが歌うんだったら、会場まで見に行きたいって言うの。ね、お願い。私たちのために歌ってくれないかしら……」

コンコばあさんは何度も願いをして、家に帰って行きました。

3日後、ウェザーおじさんはヒゲをきゅっきゅっきゅっとしごいて、次の日の天気を占いました。すると、ヒゲはまっすぐになりました。その結果を知って、島のみんなはのど自慢大会の準備に取りかかりました。

そのとき、会場のうしろに、つえをついたムナガーじいさんがいることに気づきました。その隣では、コンコばあさんがこちらに向かって手を振っています。キロロは目を閉じて、勇気をふりしぼるように歌い始めました。

声は震えて、かすれて、ときどき裏返りました。サビの部分では、いつもの「グゲ～！」が出て、会場からは笑い声が上がりました。それでも、キロロは一生懸命に歌いました。

カーン！ 審査員の鐘が一つ、会場に響き渡りました。すると、そのすぐあとに、ムナガーじいさんからは拍手が、コンコばあさんからは「ありがとう！」の声が飛んできました。キロロは目に涙を浮かべながら、諦めずに歌った自分を誇らしく思いました。晴れた空がキラキラ光って、いつもよりきれいに見えました。

小満芒種（すーまんぼうすー）

沖縄では、5月下旬の小満と6月上旬の芒種を合わせた言葉で、梅雨の時期をスーマンボーストと呼ぶよ。この頃は雨が一番多く降り、稲や麦の収穫・種まきが始まることも大切な時期なんだ。